

92 誌上発表

医師としてのチェーホフ

藤倉 一郎

藤倉医院

チェーホフはアゾフ海沿岸の港町タガンログで7人兄弟の三男として生まれた。父は封建的であったが、子供の教育には熱心であった。チェーホフはタガンログのギムナジヤから、1879年モスクワ大学医学部に入学し、翌年文壇にデビューしている。チェーホフが在学中から作品を書き始めたのは兄アレキサンドルの影響で、父が事業に失敗し家計を助けなければならないという事情があったからである。

ギムナジヤは貴族、官吏身分の子弟が優先であったが、1864年教育方針が改められ、ギムナジヤにも平民身分の出身者も入れるようになった。ギムナジヤは官吏養成機関としての意味をもっていたが、専門知識人の養成所としての役割もあった。貴族身分出身者は官吏を目指したのに対し、平民身分出身者は専門職の知識を身につけようとした。全学生の中で貴族身分出身者のしめる割合は46.7%であったが、医学部では39.4%であった。チェーホフが医学部を選んだのは当時ごく普通の実験だった。

1884年医学部を卒業し、アルハンゲリスキーが院長をつとめるヴォスクレセンスク村の郡立病院に勤務した。院長不在時は郡会医として死体解剖をしたり、検死までした。その後モスクワにもどりサドヴァヤ・クドリンスカヤ街で開業医の表札を掲げた。

1885年モスクワでチフスが流行しチェーホフはチフス対策要員として診療にかりだされた。1887年イワーノフが成功してチェーホフの名は高まった。しかし医師は給料が安くて貧しく、短命だった。1890年医師一人当たりの人口は34,927人でゼムストヴォは医療、教育、統計、農事指導という立場で民衆を啓蒙し、マルクス主義やナロードニキ主義を批判してロシア社会の改革を目指した。無料診療、住民健康管理、農民の近代医療に対する信頼、衛生教育、予防医療が主体で、医師がコレラを蔓延させているのだと噂が出るほど農民は医師を信頼していなかった。

1891年飢饉により穀物生産高は著明に減り、死者は40万人に及んだ。1892年これにひきつづいてコレラが発生、モスクワ県では7月11日に初発して、ゼムスキー・ナチャリニクからチェーホフにゼムストヴォのコレラ防疫に協力要請があった。チェーホフは賃金受け取りを拒否してこれに参加した。セルプホフ郡は人口113,000人に医師7名だった。チェーホフはメリホヴォ村の周辺26村と7工場、1修道院を担当した。朝5,00から9,00まで外来診療をし、次に村を回診した。そしてコレラ防疫、更に腸チフス、ジフテリア、猩紅熱などまで管理した。チェーホフの担当地区では16人のコレラが発症し4人死亡しただけだった。メリホヴォ臨時医療地区は1892年10月閉鎖した。

1893年チェーホフはほかの7人の医師とともに郡から表彰された。

チェーホフは1894年陪審員となり、1896年には統計活動に従事した。1897年郡ゼムストヴォ議員となった。

1897年3月チェーホフは大量咯血し、医師活動を中止した。

チェーホフのモスクワ県はコレラ防疫に最も成功した県だったので、これをモデルに各県に衛生協会が設立された。ピロゴフ医師協会も役割を果たした。こうして医師の社会的影響力は増大した。そして政治的活動が盛んになった。しかし不平等を自然の不変の掟と考えていたチェーホフは万人平等のユートピアを目指す社会主義に共感できなかった。革命運動で社会を急激に改変できると思えなかったので、チェーホフは終生革命運動にはかかわらなかった。しかし、社会がいつか変わるであろうことは信じていた。